

《JICA だより》

はじめてのジャカルタ・バンドンへの旅

遠 藤 浩 昭

10時間近くの空の旅を終え、飛行機を降りると、そこは熱帯特有の匂いと湿気が体を包む。私にとっては初めての国だが、どこか異国とは思わせない、そして懐しさすら感じさせる瞬間だ。乗客がたくさんの荷物を持ち、入国審査場に向かう。その流れに乗って歩いていると、様々な看板が見えてくる。見覚えのある看板がある。しかし、文字は英語とインドネシア語。それを見て、やっと少しずつ異国インドネシアに来たと実感し始める。入国審査の列に並び、赤ではなく緑のパスポートをカバンから取り出す。公用旅券に対し照れを感じるのは、まだ持ちなれていないせいだろうか。

ジャカルタ空港を離れ、市内のホテルに向かう。道路は整備されており、大きなネオンが光り輝いている。とてもこの国が、援助されている国とは思えない。市内中心部に近づくにつれて、高層ビルが多くなる。しかし、夜というのに裸足の Street Children が信号待ちの車に物乞いをしている。立派な道路、高層ビル、華やかなネオン、それとは裏腹に貧しい子供達。このアンバランスがインドネシアの真の姿なのだろう。

インドネシアは、国土が日本の約5倍を有し、その約75%が森林である。この国土に約1億6,000万人の人々が生活し、その9割近くがイスラム教徒と言われている。そのため、イスラムの影響が強い国である。実際、私達が訪「イ」した時に“ラマダン”という、イスラム教の断食期間の1か月が始まったところであり、彼らは日中、何も口にしてはいけないきまりになっている。しかし、インドネシアのお国柄か、イスラム教徒でも始めから断食を行わない人や、途中でギブアップする人達がいるらしく、実際日中食事をしている姿を私達は何度も目にした。それは、特に若い人にみられるようだ。もっとも、厳格にラマダンを行うとすれば、つばを飲み込むこともできないそうであるから、真面目に行う信者にとっては辛い1か月であることは間違いない。

このようなラマダンの中、私達がインドネシアを訪問した目的は、ジャワ島北西部の開発調査の事前調査である。

インドネシア到着の翌日、私達はさっそく林業省を訪れた。林業省は14階建ての立派な建物で、南国らしく建物の中に日が差し込まないように工夫してある。電気をあまり付けないためか、全体的に部屋が暗く、停電していると思わせるフロアーもあ

ENDO, Hiroaki : First Trip to Jakarta and Bandung

国際協力事業団林業水産開発協力部

った。職員の部屋は、日本の学校教室の様に全員が前方を向いており、係長の机と向かい合っている。私達が訪れた総務局は最上階で、ジャカルタ市内が一望できる。日本顔負けのビル群は、ごく限られた通りにしかなく、ほとんどが背の低いビルか、赤茶けた屋根の低い家屋である。通りから見れば近代的な高層ビルが目立ち、気付かなかったが、視点を変えるとジャカルタの街も全然違った街に見える。二面性を見せたジャカルタの空には、たくさんの燕がせわしく飛び舞っていた。

林業省での打ち合わせが終わると、私達は四輪駆動車でバンドンへ現地調査に出発した。高速道路は未完成なのか、中央分離帯が無く、その上一車線のため、追い越しをするには対向車線を使わざるを得ない。対向車が来るにもかかわらず追い越しするので、対向車は路肩に避けなければならない。また、高速道路の両脇には数 10 m の草地在り、付近の住民が洗濯物を干したり、子供達がボール遊びをしている。そしてその奥には、田畑とヤシの木の風景がしばらく続く。結局バンドン到着までの 4 時間程の間に、車両故障 2 回、接触事故 3 回を体験した。インドネシア人はスピードをかなり出す上に、狭い車間にオートバイを割り込ませる。通常は穏やかな彼らも、ハンドルを握ると性格が変わるようだ。

バンドンには高層ビルこそ見られなかったが、ジャカルタ同様大きな街である。しかし、道が入り組んでいる上に、一方通行が多く、地理感が把握にくい。市内の通りにはたくさんの露店が連なり、ドリアン、マンゴスティンを始め、様々な果物が店先に積み上げられている。

この街に、私達は 2 つの調査のための C/P 機関を持つことになる。双方とも非常に熱心に本調査に取り組んでおり、現地調査にも同行していただいた。その際、地元の郡長および村長にも同行していただき現地での情報収集等に役立った。村への調査では、村人が皆、物珍しさに私達の後をついて来たり、家から出て来て私達の行動を注視している。子供達にカメラを向けると逃げてしまったり、笑いかけても返事が来ない。飾り気の無い村人だが、どこか素朴で暖かい。「彼らのために何かをしてあげたい。」と思うが、それが一方的、あるいは偏った見方での協力ではいけない。そのためには幅広い分野で、対象となる地域を調査し、長期的な展望を持ち併せなければならないだろう。そして何よりも、彼らと彼らを取り巻く社会を主体とした計画を作ることが大切であろう。

先週平成 3 年度 JICA の入団式が行われた。新入団員の真新しいスーツを見ると、1 年前の私の入団式が思い出される。この 1 年間様々な経験を積んできたが、まだまだ勉強不足とはいけない。いつの日か、どの国に行っても、胸を張って公用旅券を入国審査係に出せるような JICA マンになりたいと思う。